

さいたまの 新しい 風

ものづくりの風

埼玉県は、飛躍的な成長が期待できるベンチャー企業を表彰する「渋沢栄一ベンチャードリーム賞」を創設。その第1回表彰式が今年1月に行われ、IT（情報技術）関連企業など5社が選ばれた。受賞企業含めたベンチャー企業10社の未来を創造する取り組みを紹介する。

渋沢栄一ベンチャードリーム賞 受賞の軌跡



最強だった人間の目に勝る機械を作ってしまった
長谷川社長

厳しく鍛えれば、若者はすぐやめてしまう。匠（たくみ）の技の伝承は難しくなった。しかし、時代をリードする超精密加工の世界でも、職人の技は不可欠だ。
加工機の先端は超高速回転している。熱で伸びたり縮んだり、コマのようなジャイロ効果で傾いたりする。その結果、プログラム通りにやっても

ベンチャードリーム賞・特別賞 「株式会社ジェイネット」

感動を再度味わうため独立 匠の技の伝承をデジタルで

誤差が出る。そこを職人が調整していた。
超精密加工メーカー「ジェイネット」（本社・越谷市）の長谷川浩幸社長が心配したのは「職人がいなく

なったら仕事が続けられなくなる」だった。「職人の代わりとなる機械を作ればいい」。単純な思いつきから模索が始まった。「失敗の連続だった」という三年間の研究開発が実を結び測定器「Jeyecore」（ジェイコア）が完成した。
顕微鏡とカメラ、測定ソフト、パソコンを組み合わせ、独自の画像処理を行う。これが半導体製造や自動車、家電の金型作りに画期的な効果をもたらし、他企業との連携により量産化も可能となった。渋沢栄一ベンチャードリーム賞「特別賞」にも輝いた。
長谷川社長は以前、大手

センサーメーカーに勤めていた。社員みんなが時間を惜しんで仕事をし、「体中からアドレナリンが出て、疲れているのに心地よい」毎日だった。このエネルギーで目標の一部上場を果たした。
高揚感はやがて薄れた。「あの感動を、もう一度味わいたい」と一九九七年、仲間と二人で独立した。当時の資本金は三百万円。「借金したら負け」と無借金経営を通した。アイデアは布団の中で浮かぶ。ひらめいたらメモをとる。考えたことを実行する。これが大きな成果に結びついた。